

饒舌に語らない「肉体」——武田泰淳「愛」のかたち」論

片岡美有季

はじめに

武田泰淳「愛」のかたち」は雑誌掲載^①のち、単行本『愛』のかたち』（一九四八年二月、八雲書店）として刊行された。

作者自身の言及によれば、本作は「不感症」に悩む町子と、「不能（インポテンツ）」の小説家・光雄の「恋愛」に関する物語^②である。

ただし二人の「恋愛」は、町子の夫（野口）や光雄とは別の恋人である詩人のMとの関係のうえに成り立つ。光雄は「肉体において、性格において、特殊な男である」ために、町子に「選ばれ」る。そうした光雄の「肉体」と「性格」の「特殊」さに触れるかたちで伊藤整は本作について、「今のインテリゲンチヤの中にある肉体的なもの、それから肉体的なものインテリゲンチヤ的な文化的なものとの距離」の「現われ消える移りかわり方」を「かなり骨を折って」「つかまえていると思う」と評価している。さらに「女の子の働き」が「精神的に働いているか、あるいは肉体的に働いているか、それを区別して、どの場面もそれ

をちゃんとこまかく書いた作品」であると述べ、「精神」と「肉体」を対置させる枠組みで本作を捉えている。^③

本作は男女の肉体の問題性を多分に孕んでいながら、同時代にこの作品が「肉体文学」との関わりをなかで読み解かれることはなかったようである。しかしながら、泰淳は後年、執筆当時の問題意識を次のように明かしている。

戦後、「肉体文学」なるものが、さかんに書かれ、さかんに読まれた一時期があった。性を抑圧されていた戦争中の反動として、性の解放がむやみに叫ばれた。肉体の裸の美しさと強さが、大げさにたたえられた。（中略）人間の肉体の美しさと強さが、おたがいに感ぜられることは、ありがたいことである。だが、その肉体の醜さや、もろさを感じられることも同様にありがたいことなのである。（限界状況における人間）一九五八年^④。傍線は引用者による。以下同）

ここでは「肉体文学」の描く「肉体」が「大げさにたたえられ

た」ものだと述べられ、「肉体文学」ブームや、「肉体」をもてはやす「性の解放」の言説に対する批判的な眼差しが示されている。同様に、「『女の部屋』後記」でも「いいかげんなところまで女の問題にふれてい」るものを「浅はかな『肉体文学』」と述べている。こうした作者自身の言明と、小説「愛」のかたち」第三章に書き込まれた「肉体文学」への批判を同一平面上の問題として配置するかは後述するとして、まずはそれに先立ち、本作において問題化されている男女の「肉体」や「肉体文学」との問題性の連なりが、先行研究でいかに整理されてきたかを確認したい。

篠田一士は、作者・泰淳が町子に「性的不具」という「生理的欠陥」のモチーフを与えることで「その肉体を精神の領域へ遮二無二つれこんだ」と評価する一方、小説そのものについては「肉体と精神、あるいは現実と超現実の異相を書き分けようとしたが、率直に言って、それは十分成功しなかった」と述べるにとどまっている。また、宮内豊のように「性的不感症という生理的な欠陥をとらえて、存在論的——ないし精神の問題として文学にもちこんだ」のは「私の知る限り」において「泰淳ひとりに尽きるはず」と称賛しつつ、「小説は作者が匙を投げたような形で終わっている」と見る意見もある。本作で描かれる「肉体」を「精神」の問題に捉え直そうとするこれらの先行論の指摘は重要である。⁶⁵

他方、山本幸正は、町子の「不感症」を二つの視点から捉える。第一に、田村泰次郎「肉体の門」(「群像」一九四七年三月)との比較である。「肉体の門」を「オーガズム」という帰結に向かって組織される二十世紀フィクションの典型」とするならば、「不感症」や「不能」は「肉体文学への批判となるのかもしれない」

と述べ、「愛」のかたち」における「肉体文学」への批判性を消極的に評している。第二に、同じく「オーガズム」を問題化した性科学との対比である。山本は、一九四六年にベストセラーになった性科学書「完全なる結婚」(ヴァン・デ・ベルデ)を引き、「不感症」に悩み続ける町子が「完全なる結婚」という理想に一貫して囚われて」おり、そうした「町子の姿は「性の解放」という時代の言説にほどよくおさまってしまふもの」でしかなく、「不感症」は「性の解放」の批判とはなり得ず、むしろそれを補強することに貢献してしまう」と論じている。

本稿は泰淳が同時代の「肉体文学」を批判的に眼差していたことに基づきつつ、「愛」のかたち」が「肉体の門」への批評性を有していることを明らかにしたい。したがって、本作における「肉体」を「精神」の問題として問い直そうとする篠田論や宮内論に重要な視座を得ながら、町子や光雄の「肉体」が「肉体の門」に描かれた「肉体」の表層性を批評しうるものとして、いかように描かれているのかを読みたい。具体的には大きく三つの観点から考察を行う。まず、「不感症」と「不能」のモチーフが「肉体」を語る問題性に連なっていることを確認する。次に、「肉体」が「疲労」を伴って描かれている点に着目し、「不感症」や「不能」が快感を感じえない「肉体」を示すにとどまらず、むしろ「精神的なものへと関連づけられていることを詳らかにする。そして最後に、「疲労」や「冒瀆」の意識が「かたち」として生成され、「肉体」が生み出した「かたち」が「肉体」それ自体をどう捉え返しているかを考えたい。

1 「不感症」と「不能」という非対称な（かたち）

「戦後」という文脈のなかで、文学に描かれた「肉体」が取り沙汰されるとき、たびたび「肉体の門」のボルネオ・マヤがその典型として挙げられてきた。たとえば、「パンパン」を「敗戦のシンボル」と述べる山本明は、「パンパン」が「肉体」の強韌さをしめすもの」であり、そうした「肉体」の強韌さを「最初に主張した」小説として田村泰次郎「肉体の門」を挙げる。また五十嵐恵邦は、「占領下の日本で注目された肉体は、特定のジェンダーのものであり、女性の身体とセクシュアリティこそが、戦後文化のなかで、贅美と商品化の焦点となった」と述べて、「肉体の門」に描かれた「パンパン」に言及している。五十嵐は一篇をボルネオ・マヤが、「性的な悦びによってめざめるといふ、啓蒙の物語」であると解する。この作品はそうした意味で「男の性的空想に訴えるもの」であり、「日本男性の主体性」が「女性の身体を用いて、戦時から戦後への歴史的連続性を確認」できたこととで、「精神的救済」がなされたと五十嵐は述べている。

では、「肉体文学」の興隆とほとんど同時に発表された本作ではどうだろうか。まず考察の前段階として、「不感症」と「不能」といういつけん対称をなしているように見える構図を確認したい。町子と光雄は「肉体ぬきの愛人どうしとして、しっくりゆきそうなもの」であるにもかかわらず「うまくいかない」関係として描かれる。作品冒頭を見てみよう。

「わたし、女ではないのよ」と打ち明けられた時、少しも驚きはしなかった。（中略）その気持ちの奥をさぐるより先に、その真剣さ、その必死さに好感が持てて「何故そんなこと言うのかな。僕はいつも満足しているのに」と、こちらも感情をこめ、おしかぶせるように言った。（第一章）

光雄は町子から「不感症」を告白されるが、自分が町子の「肉体」に「満足」していることや、町子が「子供のできる」「肉体」であることを慰みに伝えるのみで、二人の会話はかみ合っていない。町子は「悲しげな表情」で光雄を「圧倒するような体力で迫って」いく。そうした町子の行為を、光雄は「まじめな体操の試験に似た運動であり、それだけに彼女の真実さ、女らしさを無技巧に示すもの」として捉えている。ここで描かれる町子の「肉体」は光雄にとって「ほとんど自分の理想に近い身体」であり、「たくましいほど豊かな肉づき」で、「力強い肉体」である。しかし、「女としての欠陥」ゆえに、「けだるく」「物さびしげなところ」もある。

一方、光雄の「肉体」は「永い独身生活」により「性的に弱くなっていた」と説明される。また、「男としてはたらきがいまい」で「女と結びつくこと」が「不安定」であり、「性欲が気まぐれで、永続性がなく、機能が決定的瞬間を持つことが少ない」。さらに光雄の「慾望」は、「沸騰する火山のような慾望によってうらげられていない。生理で正確に規定されていない」として語られる。町子は光雄に「性的な貪慾さのない、文化人風な男」という「自分で勝手につくりあげた光雄の像」を望んで

いた。こうした光雄の「不能」の問題性を考察するにあたって、伊藤氏貴の分析による「陰萎文学」の系譜を参照したい¹³⁾。

伊藤はまず、「陰萎は彼我を問わず物語素として重要な位置を占めて」きたことや、最近では女性作家によって言及されはじめていることを前置きする。そのうえで、「文学的病」である結核や癌と比較しつつ、「陰萎」が「文学においては基本的に複雑に隠された病痕^{スライズ}」となつていくことや、「陰萎が他のなにかの隠喩となるばかりでなく、他のなにかが陰萎の隠喩となつていくことが少なくない」と指摘する。氏は「陰萎」を「自己の一部の他者化」でありまた「いざというときの役立たず」と定義するが、氏のこの定義を借りれば、「愛」のかたちにおける光雄の「不能」もまた「自己の一部の他者化」であるといえる。これは同様に、光雄の「脱糞」行為にもいえる。手のなかに収められる「Q」もまた、「自己の一部の他者化」であるといえよう。のちに「Q」についての考察と併せて詳述したい。

さて、「不感症」と「不能」の二人の関係性はいかに描かれていようだろうか。

男が自分を抱いて満足を感じている以上、そこに愛が成立したという、深い喜びが、官能のぶい彼女の全身に、しびれるような快感をあたえるのであった。(第一章)

町子は、「自分を愛してもらうためには、自分の肉体を女の肉体として愛してもらわなければならない」と考えているため、「自分を抱いて満足を感じている」光雄に魅力を感じ、自らの「肉体

を光雄に差し出す。他方、光雄は「女が歓喜の叫びもあげず、精神のふるえや、微妙な反応を示さなくも、自分だけで陶醉」する。しかし二人は「肉体的であると信じている、一種の精神的な恋情」(傍点原文)でつながっている。ここには、「肉体」に根差した恋愛関係が「精神的な」つながりを生成するという逆説が見てとれる。とくに「精神的な恋情」が「燃え、流れ、溜った」と表現されている点に着目し、「恋情」が「溜る」ものとして描かれていることには留意したい。町子が光雄の性的な「弱さ」を「一種の情熱の貯え場所」(第一章)としているように、流れ出たものが「溜る」、あるいはそれを「貯える」ことが二人の関係性を読み解くキーワードになる。

また、町子が光雄の子を妊娠したことを明かす場面では、

重苦しい不安におおいかくされた彼の内心に、自分の肉体が女に最後の結果をあたえ得たという、充実した感覚、ごくわずかであるが、勇氣に似たものが湧きあがった。(第一章)

と語られる。自らを性的「不能」とみなしていた光雄は、町子の妊娠によつて「女に最後の結果をあたえ得た」ことで「充実した感覚」と「勇氣に似たもの」を感じる。一方、妊娠した町子はといえば、「不健康に疲れている」。妊娠によつて「病的」に「くずれ弱っている」町子は、「肉体の事務的とりあつかい」として中絶手術をする。すると、町子は「一ぺんに元気をとりもどしたように見え」、「健康をとりもどした自信」が「赤い艶をおびた顔に浮んで」いるように光雄の目に映る。光雄が、町子を妊娠させた

ことで自らの性的能力に「充実」と「勇氣」を感じる反面、町子は中絶することで「元氣」と「健康」を取り戻す。それはまるで「自分の肉体を女の肉体として愛してもらわなければ」ならないと考える町子が、自分の「肉体」を性的身体として差し出すために、中絶をくり返しているように読める。

また、「不感症」であるがゆえの性的魅力も語られている。町子の「不感症」の「肉体」は、多くの男性と性的な交わりを持つたとしても、関係した「男」の気配がその「肉体」から感じられない。そこに光雄が魅力を見出す点は、光雄の性欲の表象として読み解くべき多くの示唆を含んでいる。たとえば、

男の肉体の動きがしみついていない、彼女の肉体を通じては、夫が人間としてこの世に生存していることすら、定かに想いおこすことができなかつた。(中略) 彼にとつて町子の肉体は、それだけで独立した、完全な、自分だけの対象であり、自分だけが没入する享楽の場所であつた。(第一章)

というように、町子が他の男と関係しながらも「女の身体の習慣」が町子の「肉体」から感じ取れないことで、光雄はその「肉体」を「独立した、完全な、自分だけの対象」とみなし、「没入」することができる。光雄の性的「不能」の「肉体」を、自らの「情熱」を〈貯える〉場所として町子が捉える一方で、光雄は町子自身が快楽を享ける場所として捉えている。ここに、与える／許けるといった単純な構図を見出すことができる。

そのような光雄との性交は町子にとつて「何等肉の快感のな

い、一つの努力」であり、「愛情のための犠牲的行為」であつた。こうした男女間の快感が一致しない性交に関して、今日のジェンダー／セクシュアリティ研究の領野では、挿入を伴う性交を男性本位の行為と見なし、そうした行為が長らく女性に強いいられてきた／いる構造を問題視する議論がなされている。アンドレア・ドウォーキン¹⁴はヴァン・デ・ベルデ著『完全なる結婚』(一九六四年)を批判した文章のなかで、性交における「男性の優位性」を示す「論理」として、「男が男らしくあることを両者が経験できるようにするため、男が女と性交する時、男が女を所有する」構造があると指摘する。本作においては、「犠牲的行為」としての性交だけでなく、以下の引用文にも男性中心主義的かつ性器結合主義的な視座が見出される。

男の不能者¹⁵とちがい女の場合は、男が正常なら形式的にはいちおう肉の結合が可能であるから、問題は彼女がその気にさえなればよかつた。その気になる、その気になりうる状態を持続して行けばいいのであつた。努力を努力として感ぜず、男を満足させる状態を持続すること、無感覚のままではあるが、ある時間内それに自分を専念させること、それだけが必要であつた。この敢てする密着のためには、それ故、肉の灼熱的興奮の代用として、何かひたすら堪えられるだけの精神的な動力が必要であつた。それは愛すること、肉なしで愛することであつた。この感覚のない絶対の興奮を「愛」と呼ぶうるなら、まさに愛であつた。やけじみた、複雑不可解な行動が多いわりに、光雄もMも町子に対して、かなり清潔な感

じを持ち得たのは、そういう彼女の「愛」のためではなからうか。(第四章、傍点原文)

ここでは女性が「その気になり、うる」状態を持続すれば「形式的には」「肉の結合」が可能となり、他方「無感覚」で「不感症」の女性の身体的快楽は置き去りにされたまま、「ひたすら堪え」ることが要請される。光雄もMもそこに町子の「清潔」さを見出しており、肉体的な「結合」としての性交が、「不感症」であることによって、逆に精神的な「愛」の証明となってしまう。しかし、本稿の目的は、作品内に見出せる男性中心主義的規範を糾弾することにあってではない。そうした視座が見出される点について踏まえつつも、むしろ重要視したいのは、第四章において町子が光雄との性交を拒絶することである。

町子と光雄の関係性は、最後には町子の無抵抗という形での拒絶によって変容する。あくまで光雄にとつての「愛」は「肉体」に根差すものであり、対して町子は自らの「不感症」の「肉体」を自身の「愛」の表明として与え続けてきた。これまで光雄を受け入れてきた町子が第四章では、光雄に性交を迫られると抵抗の言葉を何度も繰り返して、その果てに「弱々しく気ぬけして、まるで眼をさましたばかりの病人」のように「何も言わずにジッととお向いたまま」無抵抗でいる。光雄は「いきなり汚水に顔を漬けられ、呼吸ができなくなった想い」になり、「射精」に及ぶ。すると光雄には「深い深い悲しみ」がこみ上げてくるが、それは町子の夫・野口の「苦悩」への共鳴であり、理解であった。光雄は、「自分自身が「男」というブロンズ像の硬直した「一般存在」であ

ると認識する一方、町子は「肉体の欠陥を中心として、ただそれだけを残して、彼女の全存在が溶け流れ消えて行く」と語られる。二人の不均衡な「肉体」関係は可視化された非対称の（かたち）として明確に描き分けられることとなるのである。それはむしろ、「不感症」と「不能」が非対称の問題として示されていることを意味する。

2 饒舌に語らない「肉体」

さらに、光雄が町子の「肉体」を思い起こす際、町子の「肉体」が光雄の目に「ぼやけ」たものとして想起される点は重要だ。

それは光雄に、自分の皮膚を拡大レンズでよくよく眺めた時のあの奇怪さ、気味わるさを感じさせた。(中略)そこには納得できぬ、霧か闇が横たわっていた。そして時々、その霧と闇の中に、町子のあのような肉体が、象の肌のように大きくひろがり、うすばやけながら、無気味にその大きさを増して行く想いがした。(第一章)

光雄は自分の「皮膚」を「拡大レンズ」で見るときのような「奇怪さ、気味わるさ」を感じると同時に、町子の肉体も「象の肌のように大きくひろがり」、「うすばやけ」てしまう。「没入する享楽の場所」である町子の「肉体」は、光雄には「うすばやけ」ていて、よく見えない。このことと「肉体」を語ることは、本作では表裏の問題として存在している。「文学をやる者」である光

雄が、町子の夫である野口に對し、町子の「肉体」を「どのよう
に愛していますか」と問おうとしてそれができずに「その問い」
が「唇のところで渋く、醜く、乾きとどまった」ことには、「肉
体」を語ることの困難さが読み取れる。以下の引用文でさらに確
認したい。

後でその時の唇の味を思い出した時、光雄は、肉体という
ものには、生れたての赤ん坊のクシヤクシヤの皺や、尻の一
種特別の黄色さのような、何か口にしがたいもの、精神をあ
ざわらうものがあるな、それに関して語ることは実に困難な、
根本的な抵抗を覚悟せねばならぬことだな、と悟った。（第
一章）

光雄の言葉は唇に「渋く、醜く、乾きとどまつて、その「肉
体」は饒舌にしゃべらない。そして、そのときの「唇の味」を後
から思い出し、「肉体」には「精神をあざわらうもの」があり、
そこには「語る」ことの困難さと「根本的な抵抗」があると
「悟った」のである。「文学をやる者」である光雄が「肉体」を
語る難しさを語ることは示唆的である。さらに、これは第三章に
おける「肉体文学」批判の言に連なっている。

第三章（「私」と「私」の話）は、他章と地続きの世界として示
された作中作である。ここでは、光雄が山下と名を変え、〈私〉
（カッコなしの「私」）＝「利口な野獣」と〈私〉（カッコ付き
の「私」）＝「原始的な実行力」のある人物＝「危険な物質」と
して登場する。この章では、「肉体」を語ることの困難さが、い

かに語られているだろうか。〈私〉が友人たちの議論から少し距
離をとっていることを手掛かりにして考察する。

私の友人たちは何処へ出してもはずかしくない文化人ぞろ
いで、猛烈な批評はしても、根はきわめて物やさしい人々ば
かりであった。現代の日本の小説には批評精神がないとか、
肉体主義の作品には肉体がないとか、つまり日本の精神の危
機、文化の運命について、彼等はコップのアルコールを流し
込みながら自信を以て語り合っていた。（第三章）

いつけん、〈私〉は「肉体主義の作品には肉体がない」と主張
する立場をとっているように見える。しかし実際、一人称の〈私〉
は、「猛烈な批評」をする友人らを三人称で「彼等」と呼んでお
り、〈私〉は「肉体主義の作品には肉体がない」と議論する「彼
等」の輪の中には微妙に加わってはいない。すなわち〈私〉は、
論議の傍らに居ながらも距離を取って眼差しているのである。こ
の距離が意味するものは、「肉体文学」に「肉体」がないことを
「日本の精神の危機」に還元してしまう「彼等」に対する懷疑で
ある。たとえば「肉体文学」の旗手といわれる田村泰次郎は、「肉
体」をどのように捉えているだろうか。

私は思想というものを、自分の肉体だと考えている。自分
の肉体そのもの以外に、どこにも思想というものはないと
思っている。（中略）私は自分の肉体をどこまでも追及する
ことで、思想を探求することが出来ると思っている。いや、

自分の肉体を考えずに思想というものの存立さえも私には考えられない。(「肉体が人間である」一九四七年三月)⁽¹⁶⁾

ここで田村は、「肉体」に立脚した「思想」こそが「思想」たりえると述べている。「愛」のかたちの光雄が「ずるさ」を持った「利口な野獣」としての側面でクローズアップされるとき、「肉体のない、知恵だけの言葉」が上滑りしていくが、それは田村が批判するところの「思想」性である。しかし、本作第三章を仔細に読み解けばわかるように、〈私〉(「利口な野獣」と「私」) (「危険な物質」) は明確に使い分けられておらず、両者は混在している。それは、〈私〉／〈私〉という二つの存在が、精神／肉体といった二元論的な思考を脱するためのものであることを意味している。

泰淳がこの作品を執筆していた当時、「肉体文学」に対して批判的な立場をとっていたことはすでに確認したとおりである。ここでは、「肉体の醜さや、もろさ」に目を向けなければならぬと述べられていた。では、この作品で散見される「肉体」という言葉が、実際にはどのような表現を伴って用いられているのかを具体的に見ていきたい。見てみれば、本作における「肉体」の描写や記述が、〈疲労〉している「肉体」として描かれていることに気づく。

第一章では、光雄の「憂愁」が「ごく垢じみた、肉体の疲れ」と表現されているほか、「けだるい、うごかしがたい感覚が、彼の全身に生かじめていた」というように、「疲れ」や「けだるさ」が強調され、「肉体」や「感覚」を説明している。また、町

子については「あきらめと疲れと怒りと執念のいりまじった表情」をしていることが示されている。とりわけ、「女の肉体の疲れ、それが感覚している厭悪、それがチューブから出したての油で光る絵の具のようにそこにあつた」といった記述や、「虚脱感」がそこに、女の顔の上にあつた」という表現には、「肉体の疲れ」が「チューブから出したて」の絵の具が光る喩えによって視覚的な生々しさが付与されているだけでなく、「疲れ」や「虚脱感」が〈かたち〉として示され、存在を表わす自動詞によって語られる。

第二章においても、たとえば、「三人の男それぞれの性格と行動の間にはさまって、やがては疲労こんぱいの域に達した」というように、町子は「三人の男」の狭間で〈疲労〉している。さらには、町子はそうした状況のなかで「狭くて長い思考の路を歩きつかれ」ていく。光雄も「無意味に疲れるのが我慢できなかった」などと描かれ、〈疲労〉に自覚的な描写も見受けられる。ここで重要なのは、〈疲労〉が「思考」を駆動していることである。

第三章ではそれが直截的に書き込まれている。〈私〉の目に映る町子は、「疲れ、何か考えに沈んでいた」ために「私の奇怪なそぶりをとがめなかった」。ここで町子の「疲れ」は「思考」することと明確に結びついている。「肉体」は「疲れ」、そして「思考」する。

以上から、本作で描かれる「肉体」は「疲れ」を伴うものとして存在し、「疲れ」という肉内的な感覚は〈かたち〉として外在化されていることがわかる。そして〈疲労〉がもたらした「思考」が、再帰的に「肉体」を捉え返すことを可能にし、観念としての

「肉体」が立ち現れてくるのである。

3 光雄を照らす〈光〉と「冒瀆」の意識

本稿第一節で考察したように、町子と光雄の関係性は〈貯える〉／〈溜る〉といったキーワードで解することができた。それに対して、町子の夫である野口は、光雄に〈光〉を放つものとして描かれている。野口の「二つの眼が黒い火のように光」ると「光雄の瞳にしみ入り、しびれるような感覚」を与える（第一章）。象徴的に描かれている場面を見てみよう。

そしてまた光雄は、自分がここにこうしてMと並んでうつさ
れている、しかも野口によってうつさされていることに、複雑
な人生の虚実と、それを感じとる自分の心理の入りみだれた
反射を感じた。（第二章、傍点原文）

光雄は、野口の〈光〉に照らされることで自分自身の「心理」を
感じとる。このような光雄の認識過程は、野口やMの「感覚」が
「ヌラヌラ光りながら浮びあが」ると、光雄が「その光りものの
ために」「自分のすべてが、想いがけぬ形で照らし出され、歪み
傾いた形をおびてゆれた」（第二章）ように語られることからも
看取できる。「照らし出され」ることで、光雄ははじめて自分の
「歪み傾いた影」を見る。そして、町子と夫の野口を介して「光
雄自身も持っている」男という動物特有の、あの息苦しい精力」
のようなものを発見するのである。ここで大切なのは、照らし出

され、それを「反射」することではじめて認識が可能になるとい
う二重操作の過程である。「肉体」は「感覚」を直接語らず、他
者の「感覚」に照らし出されることで「形」として現れはじめ
る。この二重操作が、「肉体」を観念によって再帰的に見出すこ
とを可能にする。

観念により「肉体」が見出されていく過程は、続く第三章の
「脱糞」の場面にもみられる。まずは前提として、「脱糞」に関
わる光雄の「冒瀆」の意識を確認する。

自分は何物かを冒瀆している、しかもそのような冒瀆から、
もう自分ははなれられない、と彼は感じた。自分は眺めてい
る。男と女の肉体を眺めている。そのまじわりを眺めている。
情熱のこもらぬ眼で、まるで物体でも眺めるように、のぞき
込んでいる。自分はそのような冒瀆をしたし、これからもし
て行くにちがいない。（第一章）

ここに見られるように、光雄のいう「冒瀆」とは、「眺め」る
こと、あるいは「情熱のこもらぬ眼」で「まるで物体でも眺める
ように、のぞき込んでいる」ことであった。一方の〈私〉は、「清
潔」なものを汚すという行為としての「冒瀆」を行う。「眺め」
ることから「脱糞」という行為による「冒瀆」へと変容していく
わけだが、それは〈私〉にどのような変化をもたらしているだろ
うか。

〈私〉の「脱糞」は、〈私〉が「忘我無我の状態に入っていた」
とき、且に「お前はいつも『私』を出さんぞ」（第三章）と言わ

れたことに端を発している。Hの言葉にそそのかされるようにして店を出たあと、「ひどく清潔に見えた」路地にしゃがみこみ、「脱糞」する。そして行為を終えると、その直後に〈私〉にある変化がおとずれる。「私の視野は突如として荒くれたる街に向つて開かれ、私の聴覚はハッシと鳴る力と力の音に面してさらされた」（第三章）。これは第一章で示されていた、「外部から」の「何らかの力」が「見えず、聴えない」光雄が、「脱糞」を経て「視野」が開かれ、「ハッシと鳴る力と力の音」にさらされる〈私〉へと変化することを意味する。「視野」と「聴覚」が外部へ向かつて開かれた〈私〉の感覚は、さらに触覚による知覚へとつながる。「糞」を「醜悪」なものと感じて「Q」に置きかえながらも、「Q」を「自分でしまつしろ」と言われて両手ですくいあげると「なかば液体」に近かったことや、「Q」の「熱度」など、〈私〉の触覚を介した「Q」の状態が丹念に描かれる。

そもそも光雄は町子にとって、「不能」であるからこそ特別な存在たりえていた。しかし、「脱糞」事件を経て、木村（町子の恋人であり、他の章ではMと呼ばれる）から翌日届いた手紙では、町子が〈私〉に「屈服」し自分の「運命」を決めたことが明かされる。要するに、光雄が特別な存在たりえていた要因としての「不能」は、ここで背景化しているのである。続いて手紙では、「町子の肩に親しげに掛けたあなたの手は、まさか忘れやしないでしょう——あなたの汚物でよごれていたのです」（第三章、傍点原文）と、〈私〉の手に「Q」が付着していたことが強調されるだけでなく、「汚物」と言い換えられる。「光雄とMが町子に対して「かなり清潔な感じを持ち得た」ことを踏まえれば、「清潔」

に見える町子を「Q」で汚すという「冒瀆」の構図が見てとれるだろう。そして、手紙の末尾では、「あなたはこの手紙を、例の何くわぬ表情で読むでしょう」という文言に続けて、「しかも昨日の匂いの残ったあの手で開き、そして握つて」（第三章、傍点原文）と書かれ、「汚物」の付いた「手」に対する「厭悪」が語られる。〈私〉は「その手が私の手であるのは逃れようもないことなのだ」と、「汚物」で「冒瀆」した自分の「手」を〈私〉自身のものともみならずことで「冒瀆」の意識を引き受ける。

さらに重要なのは、「Q」の「匂い」に関する記述である。「Q」の匂いはまず「執念ぶかく、いかにも現実そのまま、あからさまに、私の指先をはなれな」いものとして現れる。しかし、「シヤボンをつけ、再びゴシゴシ自分の指を洗」うと「もう昨日の匂いはしなかった」。そして〈私〉は今一度嗅ぐ。すると、「かすかに匂」うものの、「それは昨日の匂い」ではなく「少し塩分をおびた、わずかそこの指紋や指の皺などにただよう、私自身の分泌する匂い」であり、「私が「私」と重なり合つて生きて行くために必要な妙な力をあたえ」るものへと変わるのである。

光雄の「不能」が「自己の一部の他者化」（伊藤氏貴）といえることは先に触れたが、「脱糞」行為によつて〈私〉の手のなかに収められた「Q」もまた〈私〉の一部を「他者化」したものである。「脱糞」により〈私〉の手に付着した「Q」の「匂い」は、〈私〉と〈私〉を重ねる力となる。「他者化」した〈私〉の一部が〈私〉と重なり合うことで「不能」の光雄は射精の可能な「肉体」になるのである。

射精による「精液」と「糞」に対応関係を見出す論もある¹⁸。た

しかに〈私〉の「手」は男根のメタファーとも読めるし、「糞」と「精液」がアナロジーになっていると見なすことは可能だ。また、心理学や精神分析学の領野においては、射精と排泄を同一視する見方もある。だがそのような観点でのみ本作の「脱糞」を捉えてしまえば、「Q」の付着した手の「匂い」を嗅ぐことで「私自身の分泌する匂い」を感じ取るようになる過程を見過ごしてしまう。重要なのは、この過程を経ることで、「肉体のない、知恵だけの言葉」を持つ〈私〉と、行為する「肉体」的な〈私〉とが重なり合えることなのである。

「不能」であった光雄の「肉体」は、〈私〉と〈私〉を重ね合わせるようにして、「他者化」された性的身体としての「不能」から「射精」する「肉体」に変容する。「Q」は「汚物」、「精液」は「汚れ」（いずれの傍点も原文）と語られ、それらの行為には否応なく「冒瀆」の意識が付き纏っていた。さらに、視覚・聴覚・触覚・嗅覚といった感覚が〈私〉の「肉体」を通して微細に見出されてゆくのである。それは、「冒瀆」という意識が、「肉体」を微視的に見出していく過程でもある。

おわりに

最終章の章題は、「愛のかたち」である。作品タイトルがカッコ付きの「愛」で表現されていることに對して、この章の「愛」にはカッコが付されていない²⁰。本文の記述に照応すれば、カッコ付きの「愛」が光雄の理解の及ばない町子の「愛」であり、カッコなしで表現される「愛」は、光雄の理解する「愛」である。つ

まり、第四章は光雄の「愛」が描かれているといえる。この章では、それまで何事にも「無感動」であった光雄が、「Q」事件と「射精」を経て、「いつものように」行っているはずの行為が、「いつもとちがった」ものにつながっていくことが描かれている。

いつものように切符を買い、いつものように錶を入れ、改札口に入る。しかし光雄は、その電車も、ホームも、見おろす新橋の街並も、その周囲の闇と光りも、いつもとちがった遙かな物につらなり、その方向に向って自分が動かされている、しかもそれは町子の肉体から出て、しかも、いつまでもその肉体の中を、その肉のぶきみな厚みと動きの中を、その「愛」の中を、どこか遠く定められた方向へ、たどり、走り、吸いこまれて行くのを感じた。(第四章)

光雄は、町子の「愛」の中へ「吸いこまれて」行くが、それは本作の構造そのものに表れている。すなわち、町子の「愛」（カッコ付きの「愛」）を意味する「愛」のかたち」という小説のなかに、光雄の「愛」（カッコなしの「愛」）を意味する「愛のかたち」という章が内含されるかたちで予め提示されていたのである。ただし、光雄が町子の「愛」の中にいるにもかかわらず、町子は「手紙」のなかで、光雄を肉体的に「うけ入れることができない」とを悲しんでおり、二人の「愛」は重なり合いつつも微妙なズレを含んで語られる。

本作は町子から光雄に宛てられた「手紙」で幕を閉じる。その

なかで、町子は「あのこと、職業にしている女のひと、もいるのに」(傍点原文) 自分自身は「あのこと」を受け入れられないと嘆く。むしろ、「あのこと、職業にしている女のひと、もいるのに」を受け入れられない、というこの一文は、「職業として「あのこと」を受け入れられる女性もいるのに、私は「愛する者」との「あのこと」すら受け入れられない」という意味で理解できる。町子は「あのこと」を「職業にしている女のひと」がいることを知りながらも、しかしその存在について記述する町子の言葉に傍点を付すのは、町子の言葉を言説化しようとする語り手である。ふたたびここで田村泰次郎「肉体の門」を持ち出せば、「肉体を売る」ことが「一つの取引」に過ぎず、逆に「金もとらずに肉体の秘密なよるこびにひたる」ことを「罪」とするボルネオ・マヤは、男性によって「肉体の秘密なよるこび」を知っていくという、いわば「男の性的空想に訴える」(五十嵐) ような女性として形象化されていた。翻って、本作では自らの「肉体」を「愛情のための犠牲」として差し出してきた「不感症」の町子が「あのこと」への抵抗を示し、「愛する者にすべての物を捧げる」ことは留保されたまま閉じられる。対照的な二つの女性像から分かるのは、町子の「肉体」がマヤの「肉体」を相対化し、反証となることである。光雄の「肉体」が饒舌にしゃべらない「肉体」として描かれていることを併して鑑みれば、「肉体」を饒舌に語る「肉体文学」の表層性が暴かれているといつてよい。

「戦後」の「肉体」を象徴するものとして、田村泰次郎の作品群は「肉体文学」と名づけられ、理解の受け皿になってきた一方で、同時代に「肉体文学」の周辺で描かれた「肉体」への詳細な

分析はなされないままとなっている。本稿では、田村があくまで「肉体」に立脚したことに対して、泰淳は観念によって再帰的に「肉体」を見出そうと試みたことを明らかにした。その意味で、「愛」のかたちは「肉体文学」への鋭い批評性を有しているといえる。

注

(1) 『増補版武田泰淳全集』第二巻(一九七八年二月、筑摩書房)には、「雑誌『個性』の昭和二十三年五月号に発表された『危険な物質』、昭和二十三年二月に発行の『序曲』(第一輯)に発表の『愛』のかたち」、昭和二十四年一月に白井書房より発行の創作集『月光都市』に収録された書き下ろしの「利口な野獣」——以上の連作三編が、昭和二十三年二月、八雲書店より刊行の単行本『愛』のかたち』において、現行のように再構成された。すなわち、「個性」に発表の「危険な物質」はそのまま長編の第一章となり、「序曲」の「愛」のかたちは分割されて、第二章「町子と夫とMと光雄と」および第四章「愛」のかたちとなり、また『月光都市』の「利口な野獣」は「私と「私」の話」と改題のうえ、長編の第三章となった。以後の再録は、すべて八雲書店版の単行本『愛』のかたち』に依拠している」とある。しかし、この「解題」に拠れば、「昭和二十四年」に創作集『月光都市』に「書き下ろ」されたはずの作品が、その前年に単行本化されていることになってしまい、記述に矛盾がある。山本幸正はこの点に関して、作者・泰淳の記述に根拠を求め、第三章が雑誌「新文化」に掲載されているのではないかと推測しつつ、「いまだ確認できていない」と言及している。(山本幸正「敗戦後と「性の解放」——武田泰淳

『愛』のかたち』を読む——、「昭和文学研究」二〇〇四年三月）。本稿を執筆するにあたり、「新文化」を確かめたところ、一九四八年三月号の五五頁から六四頁に掲載を確認できた。したがって、第三章の初出は雑誌「新文化」といえる。

(2) 武田泰淳「限界状況における人間」（毎日新聞社より刊行の『毎日宗教講座』第一巻『われらはいかなる人間であるか』一九五八年一月）

(3) 伊藤整、福田恆存、神西清「創作合評 二二回」（『群像』一九四九年三月）

(4) 前掲(2)に同じ。

(5) 『女の部屋』後記（『女の部屋』一九五一年三月、早川書房）

(6) 篠田一士「武田泰淳の小説方法」（『われらの文学』2 武田泰淳一九六七年八月、講談社）

(7) 宮内豊「武田泰淳における性と愛について」（『国文学』一九七二年七月）

(8) 山本幸正「敗戦後と「性の解放」——武田泰淳『愛』のかたち』を読む——（『昭和文学研究』二〇〇四年三月）

(9) 山本明「カストリ雑誌研究 シンボルにみる風俗史」（一九九八年八月、中央公論社）

(10) 五十嵐風那「敗戦の記憶 身体・文化・物語 1945・1970」（二〇〇七年二月、中央公論社）

(11) 前掲(2)に同じ。

(12) 伊藤氏貴「大黒の悲し喜劇——町田康による陰萎文学論序説」（『文学界』二〇〇五年七月）

(13) 町子は、光雄だけでなく、夫の野口、Mとの間にも子どもを妊娠している。本文の記述を確認すれば、「昨晩は野口氏の赤ん坊の命日で」（第二章）と書かれていることや、「Mがほめる

町子の才能」のなかに「彼女の妊娠の処理」が光雄の伝聞によって語られている（第二章）。肉体関係を持った男性登場人物との間に、それぞれ子どもを身ごもりながらも流産（あるいは「赤ん坊」のうちに亡くす）ことで、母親にならない（ならない）町子の「肉体」が提示されている。

(14) アンドレア・ドウォーキン『インターコース 性的行為の政治学』（寺沢みづほ訳、一九八九年八月、青土社。原著は一九八七年）

(15) 文学に政治性の問題を読み込んだケイト・ミレットは、「不感症」についての多くの症例を研究したフロイトが「不感症」を結局「体質的」な問題に取り込んだことに関して、以下のように批判している。「女性の性的不感症ないし低性欲が広く見られた時代に暮らしながら、フロイトは不感症の社会的含み、女性愛にたいする罪悪感ないし否定的態度の社会的含みだけでなく、女性の抵抗の意味も十分に理解しなかった」。ミレットの指摘には、「不感症」には「社会的含み」つまり社会構造に起因した問題があることが提示されている。（藤枝濤子、横山貞子、加地永都子、滝沢海南子訳、『性の政治学』。一九七三年九月、自由国民社。原著は一九七〇年）

(16) 田村泰次郎「肉体が人間である」（『肉体の文学』一九四八年二月、草野書房。なお、引用は「田村泰次郎選集 5」に拠る）

(17) 田村はこの文章で、「肉体を忘れた「思想」が、正常の軌道を踏みはずしたような民族の動きに対してなんの抑制も、抵抗もなし得なかったのを見た」と述べ、「大戦争」で「負けた」ことの「重大な原因の一つ」に「私たち」の「肉体をはなれた」「思想」があると問題視する。つまり、「肉体だけが真実」だという田村の言葉は、「肉体のない」「思想」が「正常な軌道を踏みはずし」てしまったことへのある種の反省と警鐘の文脈

で読まれるべき言葉であることをここに触れておく。

- (18) 山本幸正「敗戦後と「性の解放」——武田泰淳「愛」の「かたち」を読む——」(前掲(8)に同じ)。

- (19) たとえば「オルガスムの機能」(W・ライヒ、渡辺武達訳。一九七三年、太平出版社。原著は一九四八年)では不能の男性

にとって「性行為は、嫌悪感を伴う排泄にすぎない」と述べられている。

- (20) ただし、初版本である八雲書店版の「愛」の「かたち」では、目次に記された最終章の章題と、本文中での章題の表記に揺れがある。目次では「愛」にカッコが付された表現がなされているのに対して、本文中に記された章題の「愛」にはカッコが付されていない。本稿では、初版本を底本として再録した全集のカッコなしの表記に則り、考察した。

- (21) 五十嵐恵那は前掲書のなかで、『大衆文化事典』の整理に基づき「坂口安吾、船橋聖一、丹羽文雄、北原武夫、井上友一郎といった作家の戦後直後に書かれた作品も「肉体文学」として扱われた」と注で説明を付している。また、武田泰淳自身も、「作家と人物」(『文明』一九四七年四月)のなかで、「肉体主義者である田村泰次郎氏や坂口安吾氏」と述べており、それぞれの作品に対する泰淳の評価は異なっており示されているものの、「肉体」を描く作家はのべつまくなしに「肉体派」や「肉体主義者」と名づけられ、まとめられてしまっていた。なお、坂口安吾と田村泰次郎の描いた「肉体」の差異を論じたものとして、山本幸正「〈肉体〉と〈孤独〉——肉体文学と坂口安吾」(『文芸と批評』二〇〇一年五月)の論考がある。

※武田泰淳の文章の引用は、『増補版武田泰淳全集』(筑摩書房)に拠った。また、田村泰次郎の文章については、『田村泰次郎選集』(日

本図書センター)から引用した。なお、旧字体は新字体に、仮名遣いは現代仮名遣いに改めた。ルビは適宜省略してある。

(かたおか みゆき 本学大学院博士後期課程)